

モデル事業名	耕作放棄地での野菜づくりを通じた地域住民との交流プロジェクト
活動団体名	特定非営利活動法人 宇都宮まちづくり市民工房
ホームページ	http://homepage2.nifty.com/shiminkoubou/
所属/ 担当者名	岩井俊宗
連絡先	028-634-9901、 utshiminkoubou@yahoo.co.jp
活動地域	栃木県日光市三依地区

● 活動地域の概要

日光市三依地区は横川、上三依、中三依、芹沢、独鈷沢、五十里の6集落からなる。人口に占める高齢者(65歳以上)の割合と集落人口、世帯数は、横川50%、86人、41世帯。上三依43.1%、104人41世帯、中三依48%、245人、103世帯、芹沢42.7%、87人37世帯、独鈷沢67.6%、33人16世帯、五十里41.2%、15人7世帯となる。(高齢者の割合は「下野新聞」による、2007年1月17日。各集落の人数と世帯数は日光市のデータより、平成19年4月1日現在)。
交通事情に関しては、主要道路として国道121号線と野岩鉄道が通っている。しかしながら高齢化に伴い、車を運転する人が減り、鉄道も高額のため、利用者はあまりいない。一番近いスーパーなどの商店は、車で30分かかる(鬼怒川温泉)。また中心市街地には、車で1時間半程度かかる。



【位置図】
栃木県内図



【位置図】
日光市内図



【三依地区中心地】



【上三依地区耕作放棄地再生事業対象地】

● 活動地域の課題

野菜作りを通じた地域住民との交流事業で地域の生活課題ヒアリング活動により、以下のような課題が判明した。

- ・耕作放棄地: 年々増えて来ている。高齢化に伴い農業をする人が減ってきていること。跡継ぎがないこと。野菜を作っても鳥獣被害を受け、作る気が萎えてしまうこと。などが要因として考えられる。
- ・医療の問題: 週一回の診療所はあるもの、それだけでは心配との声。
- ・交通の問題: 診療所へ行くためにボランティアでバスを運行しているが、安定供給の点で心配がある。また買い物などは、集落から離れたところに行く必要性があり、車がある人に同乗していくなどの対応はしているが、不便。また集落内のガソリンスタンドがすべて閉鎖したこともあり、車のガソリンは遠出したときに入れられるが、農業機(トラクターなど)に使う軽油は手に入らず困っている。
- ・鳥獣被害: 作っても猿やイノシシに農作物がやられてしまい、生きがい作りの野菜作りへの気持ちがなえてしまう。また個体数調整を兼ねた地元猟友会も高齢化と減少(現在4人)で追いつかない。
- ・空き家問題: 空き家もあるが、地域住民の貸し出すことへの抵抗感もあり、有効活用とはいかない。また地域には不動産屋はいないことも1つの要因として考えられる。
- ・情報の問題: 地上デジタル放送が入らない地域になっている。またブロードバンド環境もインターネット光も入らず、ISDNのまま対応している。観光が主要産業であるものの外への情報発信が弱く、悩んでいる。
- ・雪かきの問題: 昨年度はあまり降らなかったが、それでも県内一の豪雪地帯でもあり、1mは積もった。高齢化に伴い、雪かきの負担は大きい。家の前までは何とかできるが、屋根の上や公共の場所(公民館や消防小屋前)、空き家の前までは人手が回らない。

● 活動の内容

平成20年度

- ・耕作放棄地を活用した野菜作り→400坪の耕作放棄地を借り、地域住民の指導を受け、キャベツ、白菜、さつまいも、大根、を作付け。地域住民の生きがいつくりの野菜作りを通して交流し、顔の見える関係を形成。
- ・地元振興委員会に参加→野菜作りの交流から、地域の課題や将来における地域振興を考える住民の会に出席。JR事業「駅からハイキング」のお手伝い等を実施。
- ・よそ者による地域のいい所発見写真隊→地域振興委員会の協力を得て(回覧版で告知)、若者が地域内を歩き、若者/よそ者の視点から見た地域のいいところの撮影し再発見した。後に、地域のHPに掲載。
- ・地域の生活の知恵の伝承→炭の作り方の指導を受け、技術伝承。
- ・萱刈り→3年以上の耕作放棄地 2000坪の再生を任せられ、試行錯誤しながら実施。活用策を検討し、再生方法を模索。
- ・雪かき→雪かき隊を編成し、野菜作り等を教えて頂いたお礼に集落の雪かきを実施。
- ・限界集落課題把握と資源発信→ブログを活用し、三依地区での活動を記録し、その情報を発信し、高齢集落の魅力を発信。分科会やフォーラムで、限界集落の試みや課題を発表。

平成21年度

- ・地域住民の方と耕作放棄地での野菜づくり→昨年の作物に加え、戦略作物としてにんにくの試験的作付け。11月、鳥獣害を受け、大根、白菜が壊滅。流通に関しては、地域の生きがいつくり農業をお小遣い稼ぎ農業にすべく、直売所への作物の販路開拓に成功。
- ・地域の方との交流事業→地域振興委員会との意見交換の実施。お互いの地域に対する想いを共有。今後も連携していくことと、当団体の活動拠点を用意してくれることになった。
- ・地域資源を活用したキャンプ事業→地域の資源と住民との連携を活かして、地域資源活用キャンプを実施のべ30人が参加。
- ・地域課題に対応した耕作放棄地再生萱刈りツアー事業→観光型ツアーではなく、体験型ツアーの試験的実施。7名の参加。
- ・炭作り事業→昨年の技術伝承の他、住民の炭作りの技術を映像で記録。
- ・幻の古道下野街道再生整備事業→地域の自治会からの依頼を受け、旧西会津街道の山林の整備を実施。今後遊歩道化していく予定。
- ・日光市高齢化集落アドバイザーに就任→日光市内の全地域の高齢化集落を行政職員と周り、事業アドバイスをを行う。三依地区、足尾南部地区で実施。
- ・情報発信事業(講演事業)→烏山高校、さわやか福祉財団、とちぎユースワークカレッジ等、延べ、400名の受講者。

● 活動の成果 平成20年度

(活動の成果、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入)

- ・よそ者を受け入れたことのない地域が、よそ者に対して理解を示し、受け入れてくれる文化土壌を形成できたことは大きいと捉えている。→地域住民から声をかけられるようになった。
- ・地元の地域振興委員会にメンバーとして参加できるようになった。
- ・日光市の高齢化集落アドバイザーとして委嘱された(岩井)。21年度より活動→他地域のアドバイス。
- ・県内において限界集落支援の活動をしているNPOを伝えることができたことにより限界集落の抱える課題を明らかにし、様々なセクター/機関で連携しながら取り組むことで社会課題の1つとしての認知を提案することができた。
- ・地域住民や地域住民以外の関係者とのネットワーク形成や協力関係を構築することができた。
- ・地域課題に対応した事業を地域住民との協力を得て展開することができた。(畑、萱刈り、炭作り、雪かき、雪合戦)
- ・地域内の複数のキーパーソンと繋がることができた。協力関係ができた。
- ・県外の限界集落支援団体との繋がりができた(東京:NPO法人NICE、NPO法人樹恩ネットワーク、地球環境パートナーシッププラザ、など)。
- ・地域のおまつりに準備/参加することができた。
- ・野菜の商品の中に耕作放棄地再生資金を載せた販売活動ができた。
- ・地域住民や行政からの相談を受ける関係ができた。(地元小中学校で不登校の子の受入の検討の相談、限界集落施策の相談、来年度以降の事業に土地を使ってもらいたい、空き家を活用してもらいたいなど)。
- ・地域住民から来年度一緒に事業をしたいとの申し出を受ける。(自然体験遊び、雪合戦など)
- ・よそ者となか者が意見交換できる場を作ることができた。(栃木市民活動・ボランティアフォーラム)
- ・限界集落におけるボランティアコーディネーションにおける研究と発表することができた。(日本ボランティアコーディネーター研究集会)



耕作放棄地活用した野菜集落の収穫

・平成21年度

(活動の状況、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入)

- ・活動状況としては、耕作放棄地の再生事業と、野菜作り事業を連動し、地域の生きがいづくり農業の再興とお小遣い稼ぎ農業で更なる生きがい創出を実施。また交流人口を増やし、三依地区のよさを感じてもらおう地域資源活用ツアーを実施。ツアーを実施するにあたり、地域住民の協力を得ながら、共同開催ができつつある。よそ者を受け入れてくれる恩返しに雪かきを行っているが、地域の自治会の依頼に基づき、独居老人宅の雪を実施。
- ・地域内での反響として、よそ者/若者の視点で地域の未来を考えてくれたり、三依地区に対して想いを持って話をしてくることも実際に来てくれることが嬉しいとのこと。関わりの中で双方にやりがいや楽しみを持ち交流できている。
- ・効果、および波及効果としては、日光市の高齢化集落アドバイザーとして委嘱(岩井)を受け、日光市内の他の高齢化集落に現地視察を経て対応プロセスや事業プランアドバイスの実施。その他、当団体の雪かき事業をモデルとして日光市が雪かきボランティアの育成と仕組みを検討し相談を受ける。また他のグループが雪かき支援グループを形成され指導の依頼をされる。

そして、地域住民や行政と率直な意見交換をすることができ、お互いアイデア交換や意見交換が日常的にできるようになった。地域との調整役も複数名育てることができ、事業によってリーダーを代えることができ、コアに担える人材を育てることができた。プロジェクトメンバーも着実に増え、当初15名から45名になった。



地域資源活用ツアー(みよりキャンプ)の様子

● 今後の課題及び展望

・課題

地域への入り方に一番気を使った。人の手を借りたいと地域住民が思い、こちらもお手伝いしたいと思っても、双方に何者かわからない不信感が始めはあった。それを信用してもらうためにどうするかを伝えることができれば、村の担い手の参入は広がると思う。今回は、地域とNPOをつながれる時に、共通の地元新聞記者と行政職員がいたことに助けられた。また自治会代表も新たな試みとよその力の必要性を感じており、理解しようとしてつづけてくれたことが良好な関係を形成できた要因と考える。また地域とのつながりは、最初に中心的に地域に入っていく者の帰属され、更なる担い手を育てる時に、地域との関係を他のメンバーと共有や分担していくことに気を使った。これは、地道に地域と話に行く時に、共に行き、紹介をし、直接のやりとりはこの若者でお願いしますということで対応できた。

新たな担い手の必要性和反して、新たな担い手が安定的に支えられる環境の必要性を実感。交通費や人件費を提供することができれば、想いに加えてより関わる時間の確保が実現する。そうした経済的環境を創造していくことも村の担い手を育てていくことに重要だと思う。

・展望

今後の取り組みとしては、さらに継続的に地域との関わる時間と人材を増やす意味でも、事業の魅力づくりや地域との関わりを深化、財政の確保を重点に捉えている。次年度はニーズが高く、事業性の可能性もある事業にも着手する予定。

具体的には、地域のガソリンスタンドの週末のみ復活事業、お米の宅配事業、ふるさとを離れた若者への情報発信とふるさと寄付事業を考えている。次年度は、空き家を確保することが実現するので、滞在型の事業プログラムを形成することができ、より地域との関わりや更なる地域ニーズを発掘することができる。

また次年度は、「村の担い手育成事業(村落支援員と村落調整の養成)」として助成金を受け、人材育成プログラムの開発と実践型研修の実施予定。